



ひかりの子幼稚園  
園長 若槻 三記子

寒さが本格的になってきましたが、子どもたちはサンタさんの訪れに大騒ぎしています。  
先日は、お忙しい中、クリスマス会にお越しいただきありがとうございました。共にクリスマスをお祝いできたことを感謝申し上げます。

『世界で最初のクリスマス』のご降誕劇をこひつじ組が礼拝として神様に捧げ、お家の方や大好きな人、小さいクラスのお友達に伝えると言う役目を果たしました。役決めの話し合いから難航したクラスもありました。一人でお言葉を言うのも大変勇気があるもので、互いを認め合い、助けあって、作り上げていったクリスマスページェントは、どのクラスも素晴らしく、心揺さぶられ感動しました。

また、その姿を観て憧れを持ち、自分達も頑張ろうとこばと組は、『分かち合う喜び』をテーマにした劇あそびをしました。どんな動物を登場させるか、何役をするか、どのように表現するか話し合いを重ね、自分の意思で決めました。最後の『手をつなごう』のうたも思い思いの振り付けと歌声に元氣と勇気をもらいました。

こうさぎ組は、様々な楽器に触れ、どの楽器をするか話し合いで決めました。初めてづくしのこうさぎ組でしたが、ピアノの音に合わせてお辞儀や挨拶をし、うたと楽器あそびを行いました。緊張しながらも大好きなお家の人に届けようと一生懸命表現していた姿はとても愛らしく微笑ましかったです。

こりす組は、お家の人と一緒にスノードーム作りをしてクリスマスをお祝いしました。ホールでの他学年の取り組みを真剣に観ていました。来年の姿が楽しみです！

なによりも舞台に立った子どもたちを観るお家の方々の温かな眼差しと雰囲気の中で、子どもたちは自分を解放し、自由に表現することができたのだと思います。上手・下手という評価ではなく「今のあなたがそのままですばらしい」という全肯定の土台があつてこそ、子どもたちは安心して自分をだすことができるようになります。恥ずかしかったり、緊張する姿も含め、そのすべてが子どもたちの「ありのまま」であり、尊い表現でした。

行事を通じて得た「みんなと一緒に成し遂げる喜び」や「自分の思いを形にする自信」は、これからの園生活の大きな力になります。保護者の皆様には、今日までのお子様の心の葛藤や挑戦の歩みを、たくさん褒めてあげただければと思います。

### ★「おとめが身ごもって、男の子を産む。その名はインマヌエルと呼ばれる。」

マタイによる福音書1章23節

インマヌエルとは、ヘブライ語で『神様が私達と共にいてくださる』という意味です。悲しい時も、つらい時も、悩みの中にある時も、神様は私たちと共にいて下さいます。暗闇を照らす希望の光として、神様は人となってこの世に来てくださいました。神様が私たちを愛してくださるように、私達も周りの人たちに『ありがとう』の感謝を伝え、喜びを分かちあえますように。どうぞ素敵なクリスマスをお過ごしください。そして、新しく迎える一年も、神様の豊かな祝福がありますことをお祈り申し上げます。



## 【大橋先生教育講演会『豊かな心を育む造形あそび』第2弾】

大橋先生の『豊かな造形あそび』の講演会の内容を11月に引き続きお伝えしたいと思います。

大橋先生は、中学の美術教師になって様々な疑問が湧いてこられたそうです。「人の数だけアートはある」「なぜ子どもたちに同じようなものを作らせようとしているのか」「朝の1限目から絵が描きたいと思いますか？」

学び直しをしようと大学に行かれた先で、幼稚園教諭をされていた方に会われ、子どもを捉える視点の違いに気付かれました。

「子どものやりたい気持ちを起こさせることが僕らの仕事！自分は、子どもを使って自分の絵を描こうとしていた」と。

子どもたちも先生が何を求めているのか正解を考えながら描こうとしてしまうというお話に、私自身、大人から見た見栄えのする絵を描くよう子どもたちに声掛けしていたことを反省しました。

造形あそびとは何でしょうか。子どもたちが素材に触れ、考え、試行錯誤し、「こうしたい！」という気持ちを形にしようとする心のプロセスそのものが造形あそびです。その日、その時その子が生きていた跡、楽しかった跡が造形であり、この体験を何度も重ねた子は、表現が豊かになると先生は言われます。

『絵のおはなし』を今年度より行っていますが、子どもの絵の肯定的な見方がよくわからないという話を保護者の声を耳にします。先生からお聞きした絵の見方をまとめましたので、参考の一つにして頂ければと思います。年少の初めての水性ペン画です。



掃除機の動きを線で表現。色を次々に変え直線的な線からぐるぐると円を描き楽しんでいる様子がうかがえます。何を描いたというより、「いろんな色を使っていっぱいぐるぐるして描いたんだね」と共感してみてください。描いているうちに左上に顔のようなものが登場。おばけを連想し…そこからお話が展開されるかもしれません。



大人から見たらただの丸を描いたように思えますが、「オムライス」だそうです。やみくもに描いた線ではなく、すっきりした線で描かれています。オムライスを描こうと思って描いたかは定かではありませんが、その形から具体的な形を連想し意味付けしている絵は、成長の証です。



僕がお昼寝しているところの絵です。顔だけを描いたのではなく、顔というシンボルを使ってその人全体を表現しています。横長に描いたということは、その子が工夫したことが分かります。よくお話を聞いてみると、「僕寝ている時は目が見えないよ。でもここに目があるの。寝ている時、お口をう～んとしたら息ができないと思うでしょ。でも鼻で息をしているんだよ！」

そう言われてみると、なるほどよく分かっているなと感心しますね。

→この段階を経て、顔から手足が出る頭足人の絵になっていきます。→



『お芋ほり』が題材だったようです。先生に言われたのでお芋を描こうとするのですが、お芋の絵？がたまごに変身、そのたまごの中には大好きな恐竜がいる！くるくる描いているのは、芋のつるにも見えますが、恐竜がたまごから出てきて走り回っているのかも…『そしてお芋』とお芋のことを思い出して取りあえずお芋を描いているところが面白いですね。

大橋先生の資料より↓



5・6歳頃の子どもは、必ずしも人物を画面の中央に大きく描いたり、背景を塗ったりしません。画面の下に地面を表す横線や草を描き、上には空や雲、太陽を描きます。最初は、人間を大きく描きますが、だんだん人間を小さく描くようになります。それは、自分の姿を視覚的にイメージできるようになった、世界の捉え方が発達したからなのです。背景を塗らないのは、自分の周りには透明な空気だからです。それなのに「もっと大きく描きましょう」「白い部分に色を塗りましょう」と言うのは、発達年齢と世界の捉え方を理解していないからです。

左下の絵は、いきいきと描かれていますが、「背景も塗って」と先生に言われたのでしょう。

子どもの視点からは、腰まで土に埋まっているように感じるのです。



【まずは受容と共感が大切】 ※大橋先生の研修スライドより

- ・子どもが絵を描いたり物を作ったりするのは、健康的な成長のため。
- ・大人が見て「上手な」作品をつくらせることは、子どもの健康的な育ちと相反する。
- ・最も大切なことは、自ら問を生み出し、問い続ける行為と思考である。
- ・そのはじめの一步は、眼前の活動に夢中「没頭」することである。
- ・そのために大人がすべきことのはじめの一步は、子どもの表現を肯定的に受容し、共感をしめすことである。



大橋先生に全クラスをめぐって頂き、子どもたちの遊んだ足跡をみてもらいました。子どもたちのアイデアや先生達が工夫しているところをたくさん「いいね！」と言って頂き、これでいいのだという自信が持てました。作品の出来栄ではなく、子どもたちが材料や環境と関わり、思考錯誤し、喜びや驚きを発見する過程が大切だと学びました。子ども一人ひとりの「**あるがままの表現**」を受け入れ共感すること、それが子どもたちの自己実現の土台になるのだと改めて感じました。「面白い」「やってみたい」と思えるようなきっかけ作りをしながら、これからも造形あそびを子どもたちと一緒に楽しみたいと思います。

【大橋先生の教育講演会に参加された方の感想の抜粋です！】

- 子どもの絵は理解できないものが多く、どう聞いて捉えてあげたらよいか分かりませんでした。  
先生のお話を聞き、見方や聞き方が分かり、絵を通してもっと子どもの世界を知って行こうと思いました。
- 絵を介してお話を聞く時間そのものが、自分に興味を向けてもらっている・愛されていると感じることのできる大切な時間になるのだと勉強になった。園で取り組まれている造形表現は、造形にとどまらず社会や理科など様々な分野にわたる学びにつながっていると感じた。
- 園で行われている造形あそびが、子どもたちにとって多くの学びになっていると思いました。  
全身を使った色遊びや大きい工作のことを楽しそうに話してくれます。
- 絵としては描かれていなくても、話してくれるストーリーにはでてくるものがあったり…話しながらでてくるその発想も大切にしたいなと感じることができました。
- 子どもの絵にもそれぞれちゃんとストーリーがあることを改めて認識できました。子どもの発想力の豊かさを、常識や固定概念を大人が押し付けたりせず、どんどん伸ばして行って、その世界観を広げて行って欲しいと思いました。
- 深く、普遍的なお話を聞かせていただき、自分の子どもを見る眸が広がったように感じます。  
自己表現については、ひかりの子幼稚園でとても大切にしているのを日々感じます。私には顔を描いたように見えた絵が、描いた子どもさんは手持ちの手段で全てを表現していると言うお話は思ってもみなかったことで、とても感動しました。絵から広がる子どもの世界を感じる目を教えていただきました。
- 子どもが表現したこと一つひとつ意味があって、それを引き出すことの大切さを感じました。  
丁寧な環境づくりをしてくださっている先生方がいるからこそ、子どもたちが楽しく、主体的に取り組んでいるんだなと感謝の気持ちでいっぱいになりました。
- 年長の時の記憶に…先生がクレパスを持つ私の手を持って「もっとこう描いたらいいよ」と描き足していました。結果、その絵は賞を取りましたが、私は全く嬉しくなかったです。あの時の私は自分の表現ができなかったから、また否定されたような気持ちになったから嬉しくなかったのだと腑に落ちました。  
心を解放して安心してあるがままの自分を表現することが本当に幼児期に大事なのだと感じました。
- わくわくする時間でした。愛のお話だなあ、心の中においておきたいワードがたくさんです。  
ひかりの子のプロジェクトのお話、取り組み、絵の解説を聞きながら、私が子どもになってこの幼稚園で過ごしたいと思いました。
- 大人が思う絵を期待してしまうところが自分にもあったので、先生の話から子どもなりの気付きや思いが詰まった絵を壊してしまわないようにしないと自覚されました。「この絵のお話聞かせて」この言葉をかけるだけで、嬉しそうに話だす子どもの姿にこちらも嬉しく、自然とずっと話を聞きたくなりました。描画活動に限らず、安心してあるがままの自分を出して様々なことに向かう気持ちがもてるように、子どもの聞いてほしい、見てほしい気持ちにきちんと向き合おうと思いました。